

マリアナ諸島における戦跡の観光地化に関する短期調査

人間・環境学研究科 博士後期課程 1年

福田 真郷

アメリカ合衆国

2019年11月7日～2019年11月22日

計画の概要

旅程

11月7日関空発、インチョン経由、11月8日サイパン着

11月15日サイパンからテニアン（日帰り）

11月16日サイパン発、グアム着

11月22日グアム発、関空着

北マリアナ諸島およびグアム島は、かつて太平洋戦争の激戦地として、沖縄と同様の苛烈な地上戦が展開された。多くの民間人の犠牲者を出した結果、米軍が制圧し、やがて本土空襲などへの重要な拠点となった。戦後、日本人の海外旅行解禁時には、戦没者の慰霊のための旅行が大きな動因となったが、やがてビーチリゾートでの行楽や結婚式のため人気の旅行先となる。マリアナ諸島では特にサイパン島がかつて人気を博したが、現在は日本からの直行便がなくなり（※11月29日に復活するというが）、観光客は中国人と韓国人で占められている。グアムも年々日本人の割合は減少しており、韓国人観光客の割合がここ数年日本人を上回っている。こうした状況下で、旧日本軍や戦没者の慰霊にかかわる戦跡や空間は、どのような場所として多くの観光客に「消費」されているのだろうか。「ダークツーリズム」としての戦跡観光は、中国人、韓国人観光客にほぼ有効性を持たない可能性は予想できる。過去の戦場であるリゾート地をいかに観光するのかに関心を持ち、調査した。

サイパン、テニアン、グアムの戦跡地や慰霊関係の場所を網羅的に訪問し、また、観光客や施設関係者にインタビューをした。中国人観光客にとって数少ないビザなしで渡航できる合衆国の土地であることや、近年LCCを大量に就航させている韓国のプレゼンスの大きさについても可能な限り現地でのパンフレットや聞き取りから情報を得た。

成果

サイパン、テニアン、グアムいずれも日本人観光客の存在感は予想以上に薄い。しかし、戦跡や慰霊碑は残り、また、かつて戦場であったという歴史は残り続ける。

サイパンに関しては、やはり日本の戦跡について快く思わない観光客も多い。スーサイド

クリフの警備員から聞いた話では、特に中国人観光客の素行が悪いため準州政府が警備員を置くことにしたのだという。ガムを慰霊碑に塗ったり大声で騒いだりする人が多いとのことであった。スーサイドクリフはマッピ山の上で見晴らしはいいが、アクセスの悪さからか、観光客はあまり多くなかった。それに対してバンザイクリフは北部の岸壁で海がとてもきれいに見えることから、多くの観光客が足を運ぶ。慰霊碑の多くはこの一帯に集中しているが、手を合わせる人の姿はなかった。中国人が経営する売店があり、簡体字とハングルでメニューが表記されていたことから日本人の少なさがわかる。ガラパンで中国人観光客の若者に、スーサイドクリフなどの場所についてどう思うか尋ねると、「ああいう場所は日本人のための場所だ、私たちのための場所じゃない。遺族や日本人が死んだ人を悼む場所だから中国人には関係ないと思う。」との回答を得た。一方で、中国系移民が幽霊として日本軍を目撃したという話が聞けたことは興味深かった。大量死が怪談に結び付けられて記憶されているとも言える。

また、中国人が観光客として滞在するのみならず、国籍取得のために違法な滞在をする birth tourism は、今回のメインテーマではないが、国際的な移動を考えるうえで大変面白い。オーバーステイした中国人がそうしたビジネスに従事し、妊婦にあっせんしているという話を詳しく聞くことができた。

テナアン島はかつて中国系資本のカジノがあったが、最近倒産し観光客は減った。原爆の搭載ピットや日本軍施設跡など多くの戦跡がそのままの形で残る。ほぼすべての戦跡を訪ねたが、数か所に「打倒日本帝国主義」の落書き、中国タバコなどのゴミがあったことから中国人の来訪者があったことがわかる。戦跡を訪問することでナショナリズムを高揚させる観光の在り方について考えさせられる。テナアンの北部はほぼ手付かずの自然が残り、そのなかに日米の戦跡が埋まるようにして存在している。現地在住の日本人ツアーガイドが一人いるが、そうした人以外はほとんど戦跡に来ていないようであった。

グアムは、空港近くのタモン地区に大きなホテル、ビーチ、ショッピングセンターが集中し、ほとんどの観光客がそこから出ないという問題がある。グアム観光局が2019年に空港で聞き取り調査を行ったデータでは、日本人の8パーセント、韓国人の5パーセントが戦跡に訪問したという。主な日本が関係する観光地としては、日本が建設した南太平洋戦没者慰霊公園、2つの太平洋戦争に関する博物館、また横井庄一の展示があるタロフォフォの滝行楽施設などがある。また日本軍のチャモロ人虐殺のモニュメントもある。そのほか、米軍関係の大規模な墓苑が島内各地にあった。これはグアムの経済的徴兵の結果とも言えるだろう。島内各地が高度に軍事化され、多くのチャモロ人が軍に入隊する。観光と軍関係経済に依存している点で沖縄と非常に似た状況である。それをリゾートのイメージが覆い隠している（タモン地区から出ない観光客にとっては楽園でしかない）。

戦跡は、歴史を表象する。ビーチリゾートと凄惨な地上戦はイメージとして相容れない。戦場をリゾートのイメージで塗りつぶして今のサイパン、グアムがある。グローバル化、観光地化の進展は、地域の固有性を薄め、匿名的な「ビーチ」、「南国」として消費す

ることを促した。そうした状況で、戦跡観光を「他人事」とするのではなく人類全体の負の遺産として発信することは意義深い営みである。今回の調査で得た聞き取りや情報は、今後の観光、国際的な移動、観光地化に関する調査に活用したい。



サイパン国際空港の日本軍慰霊碑



サイパン北部おきなわの塔では、法輪功が観光客に宣伝をしていた。



バンザイクリフの石碑



テナアン島の旧日本軍通信施設。蜂が多く、また建物の老朽化がひどく危険。



同施設内の落書き。うっすらと「打倒日本帝国主义」と書かれている。



テナアン島の日本の防空壕跡地ちかくで古い骨を発見したが、何のものかわからず。



国立のグアムミュージアムの日本統治時代コーナーでは、日本語の怒鳴り声が流れている。



南太平洋戦没者慰霊公苑。意外にも、中国、韓国、ベトナムからの訪問者によるお供え物も見られた。